

に立ち、歴史的な立場から作品の根柢にある精神を究明し、各々の様式に従つてその變遷を説いてゐることは、「本邦に未だ類書をみない著述」として推賞される。

一 著者望月氏は多年大阪美術館にありて多く眞蹟を見る機會をもたれ、本書には各時代及び作者の傳記を明かにして、懇切丁寧な説明が加へられてゐる。著者の主眼はむしろ後半の文人畫の勃興にあるらしく、文官、在野の士或は禪僧等に於て自由に詩境を筆端にほとばしらすもの、東洋獨自の境地として深く讀者を魅するものがある。しかし全般的に列傳風の感じ強く、殊に支那繪畫の起原を論ずる所いさゝか文獻批判に物足りないものがある。

二 水野氏の言に従へば、支那彫刻の隆盛期は南北朝より隋唐の間であり、これを讀みて雲岡曇曜五窟の石佛の條に至りては、幾度か荒野を横ぎり、この石窟の調査に身をもつて當つてゐる著者の言は、讀者に強い印象を投げつける。この石佛の赤裸々な表現の根柢にはつよい人間性に對する自覺があり、それはこの時代とこの民族とをばづつては理解出来ないものであるといひ、更に雲岡の巨大なマツスは龍門に及んで傳統的線の藝術となり、齊周においては再び解放され發展し、隋代に至りて一種の莊嚴さを加へ、唐に入り成熟して自由に且つ偉大なるまゝみをおびてくるとなす。氏の叙述は歴史的の精神と密接に結びついてゐる。

三 長廣氏の支那工藝史にありては、先づ古代の銅器が問題とされ、その驚歎すべき鑄造法の優秀性の中には、技術と別に、深く天を畏れる抽象的超越的な精神が傳統的に引きつがれゆくとなす。

然しこゝにいふ抽象性なるものが、精神の事實としては如何なるものを内容とするか、一面において具體的なるものを強く有つてゐる支那人が、何故古代においてかゝる抽象性を發揮したるかは更に深く考究さるべき問題であらう。周の工藝を禮器なりとし、それが戰國式多様性に移りゆく過程を社會的觀點より考察し、帶鉤のもつ意義を古代の服飾上より説明し、唐鏡に對しては鋭い美學的な鑑賞を試みる等、著者の考察は極めて多方向的であり興味深い筆である。

四 吾々は歴史の上で秦の咸陽宮殿や漢の未央宮が如何に莊麗なものであつたかを知つてゐる。然しそれは文獻上のことであつて文獻にのみ頼る結果は勢ひ抽象的觀念的なものに陥り易い。村田博士は今日僅かに遺れる古建築を丹念に調査せられ、各時代の王宮、宗廟、城郭都市、孔子廟、石窟、佛教・道教・回教建築、祠廟、長城等に互り、建築學の實際の上から、文獻を批判對照しつゝ、吾々に具體的な歴史を示された。たゞ今日吾々に最も親しい北京の紫禁城や熱河、萬壽山の離宮などについて、もう少し詳しい説明が欲しかつたと思ふ。(昭和十六年八月、白揚社發行、定價參閱)〔村上嘉實〕

安南通史

岩村成允著

從來安南史の研究は専らフランス東洋學者の手に委ねられ、わ

が國の學者のこの方面への關心の極めて稀薄なものであつたことは何人も否むことが出來ない。研究者の數の僅少なこと、言ひ見るべき論文の貧困と言ひ、わが網羅たる東洋史學界の中にあつて最も輕視せられ、また立遅れた部門の一つと言つて差支あるまい。従つて通史の如きものも未だ見るべきものが存せず、甚だ遺憾な状態であつたが、最近に至り始めてこの方面の通史が出現した。こゝに紹介せんとする岩村成允氏の「安南通史」がこれである。

本書の内容は總説と本説と附録の三部より成り、總説は佛領印度支那の現状と安南史の大綱とを極簡単に述べ、讀者に豫備知識を與へんとしたものであり、次の本説は四編に分れ、第一編の太古史は傳説時代、第二編上古史は支那に歸屬せし時代、第三編中古史は獨立王朝時代(黎朝迄)、第四編近世史は阮朝以後の時代を記述し、附録の國際關係史は近世史外篇として本説の近世史が主に安南の資料によれる缺陷を補ふ爲、別に條約その他歐洲日本等の諸書をもとにして書き上げたもので本説近世史と彼此對照理解せしめる仕組である。

扱、本書の文體はすべて文語體を用ひ、その叙述法は編年體を採用してゐるが、これは著者の言によれば、その據つた安南の資料が漢文で書かれ且つ編年體なるが爲である。然らばその據つた安南の資料はと言へば第一に大越史記全書、次いで欽定越史通鑑綱目であり、更に阮朝下の近世史にあつては大南寔錄等がこれである。即ち本書は之等の安南の史書、實錄等の中より重要史實を年代順に抽出日本語に書き下し、讀者をして安南史の全貌を窺

はしめんとしたのであるが、同時にこれが年表的効果を兼ね備へてゐる點は便利である。たゞ憾むべきは史實の取捨選擇が不充分で、往々比較的重要史實を脱落せることである、尙安南の資料を重視せる餘り、最近の研究成果が闕却されてあり、近世史にあつては本説と附録との記述の齟齬について何等の註釋も施されてゐないことも遺憾である。また本書が記録を本とし且つその重點が近世史に置かれてゐる以上致し方もあるまいが、著者もいふその記録の信じ難しとする太古史に於て確實に信じ得べき遺物による考古學的研究があることに何等の注意を拂はれなかつた事も物足りぬ所であらう。

以上二三勝手な言を弄したが、本書が刻下の必要に應ずべく急遽出版された以上、多少の缺點あるは寧ろ當然であり、殊に上述の如く未だ基礎的研究も不十分な安南史研究の現状からして、より優れた通史の著作は尙將來に期待すべきである。殊に本書は以上の外、附録として安南歴代帝王年表、安南歴史研究參考資料、索引が附され、また本文中隨所に系圖、歴史地圖、圖版等が豊富に挿入せられ讀者の理解を助けるよすがとしてある。更に別刷としては著者苦心の作になる二百五十萬分の一佛領印度支那全圖が一葉添附され、通史の體裁としては申分のない方である。近時俗悪なる南方關係書が濫出する中に本書の如きは最も良心的な著作の一つであり、この點著者に對し滿腔の敬意を表する次第である。(昭和十六年八月、富山房發行、四六版本文四九四頁、定價七圓)(藤原利一郎)